

【目的】現在，日常の衣生活においては洋装が大半を占めるため，浴衣着用時にも洋装用ブラジャーを着用する人が多い．本研究では，浴衣着用時に適した下着の着用条件を見出すことを目的として，定量的および視覚的に浴衣着崩れについて検討する．

【方法】被験者は女子大生3名とする．下着条件を裸体，洋装用ブラジャー着用および和装用ブラジャー着用とする．その上に浴衣着用して下肢運動を行い，浴衣表面の乳頭点など5箇所の計測点の座標値の経時変化を，ビデオ計測により読み取る．座標値から，[乳頭点の振幅]と[左右乳頭間距離のばらつき(標準偏差)]をそれぞれ垂直・水平成分について求める．さらに，着崩れを示す指標として5項目を設定して計測し，その変化量から着崩れ量の下着着用条件による違いを定量的に把握する．また，三次元計測を行い，下着の整容効果の観察と浴衣表面形状の評価をモアレ縞表示で行う．

【結果及び考察】洋・和装用ブラジャー着用時と比べて，裸体では[振幅][ばらつき]が垂直・水平成分いずれも顕著に大きい値を示した¹⁾．今回，その上に浴衣着用すると，むしろ，垂直成分の[振幅][ばらつき]は洋装用ブラジャー着用時で最大値を示ようになることがわかった．これは，裸体よりも洋装用ブラジャー着用時に浴衣表面の動きが大きく，複雑になる傾向があることを意味するものである．一方，和装用ブラジャーの[振幅][ばらつき]を抑制する効果は，浴衣着用しても垂直・水平成分共に認められ，特に水平成分での効果が大きいことがわかった．さらに和装用ブラジャーでは着崩れ量も運動速度および個人によらず最も少ないことが示された． 1)日本家政学会第49回大会(1997)に於いて発表